

Y04b 小惑星探査ミッション「はやぶさ」がもたらしたアウトリーチ効果

吉川 真、矢野 創、本間 幸子、森本 睦子、橋本 樹明、久保田 孝、岸 晃孝、國中 均、川口 淳一郎 (JAXA)、齋藤 潤 (東海大)、秋山 演亮 (秋田大)、寺藺 淳也 (会津大)

小惑星探査機「はやぶさ」は、2003年5月に打ち上げられ、2005年9月には小惑星イトカワに到着し、観測や表面物質の採取を試みた。そして、現在、2010年の地球帰還をめざして運用中である。打ち上げまでの準備期間として15年以上、そして打ち上がってからすでに4年間が経過したが、この間、「はやぶさ」は本来の研究目的以外のアウトリーチ的な活動でもさまざまな活躍を見せてきた。本発表では、「はやぶさ」のアウトリーチ的な効果についての調査結果について報告する。

「はやぶさ」のアウトリーチ効果についての調査は、まず予備調査として簡易なものであるが、2007年5月に、公開天文台ネットワーク (paonet)、天文教育普及研究会、日本天文学会、日本惑星科学会のメーリングリストを通じて情報提供を呼びかけることで行った。また、日本プラネタリウム協議会や公開天文台協会にも関係者の方から呼びかけていただいた。その結果、2007年6月までに70通ほどの電子メールで情報が寄せられた。

寄せられた情報を事例ごとに分けてみると、総数が180件ほどになった。その内訳は、講演会が70件近くあり最も多く、次いで、学校や大学での授業・講義で利用されたケースが50件ほどあった。その他、プラネタリウム関係や展示がそれぞれ20件ほどあった。ユニークなところでは、音楽に関するものや、サイエンスカフェ、そして学校の教科書に取りあげられた事例などがそれぞれ数件ずつあった。もちろん、ここで集めた情報がすべてではないが、今後、この情報をベースとして、さらに「はやぶさ」のアウトリーチ効果の検証を進める予定である。そして、次のミッションにおいては、より進んだアウトリーチ活動を目指したい。